

2008 年度若手の会発表会 開催後記

2008 年度若手の会発表会が 8 月 26 日に、研究所 2 階会議室にて開催された。

開会の辞として大島総長より「研究環境の大きな変化の中、純粋に研究に集中するばかりでなく幅広く社会に目を向け、国民のニーズや成果の社会還元にも配慮した研究を目指して欲しい」との挨拶があった。引き続き研究発表が行われた。発表はスライドセッションとポスターセッションの形式から構成され、午前に前者が、午後に後者の発表を実施した。スライドセッションは 3 分間の制限時間内に各演者が研究概要や成果を紹介するもので、演者の自己紹介のみならず、自身の研究内容を魅力的で、理解し易く、簡潔に発表することを目指したものである。ポスターは研究の目的、実験方法について専門的に議論でき、また、馴染みの無い課題にたいしても初歩的質問が行えるため各研究部や省令室間の研究の相互理解に役立つものである。

スライドセッションでは、『高齢者介護支援体制の問題点や機器開発』、『中高年を対象とした疫学調査』、『認知症の診断法の開発』、『老化関連遺伝子の解析』、『認知症の発症メカニズムの解析や治療法開発』等 22 演題が発表された。この発表形式はすでに 3 年目を迎えるためか、ほとんどの演者は 3 分間の短い時間内に研究目的や成果を簡潔、明瞭にまとめていたため、研究内容の分かり易い発表が多く、予定時間の延長もなくスムーズに進行した。

ポスターセッションでは、昨年好評であった在籍責任時間（各演者のポスター前待機時間）を設定し、2 部構成の発表を行った。この発表形式は質疑の時間やスペースが十分確保されるため、多数が参加した活発な質疑や制限時間を越えた討論が継続する光景が見られた。また、初歩的な質問に対しても丁寧な応答が行われ、各研究部の研究への理解が非常に深まったように思われた。

最後に研究所長より発表会の総括が述べられ、最優秀発表および優秀発表（添付抄録）の表彰が行われて閉会となった。

センター研究所は比較的小規模なものであるが、各研究部や省令室を越えた研究所全体の交流の機会は少ない。毎年開かれる本会はこの枠を超えた研究者間の議論、交流を活発にさせ、若い研究者の自信や研究意欲を促進させる役割を果たすとともに、共同実験、実験手法の改良や新しい研究アイデアの創出の契機となってきた。2008 年度の本会はこれまで以上に研究者交流を発展させ、今後の研究活動を前進させる契機になったものと思われる。

（文責：血管性認知症研究部部長 高橋慶吉）